3 産業の発展と都市と村

農業

米や麦などといった（二毛作）が広がり、かんがいに（水車）を使ったり、肥料に牛や馬のふんや（堆肥）を使うようになり、収穫が増えていきました。

工業

京都の西陣などが有名な（絹織物）や、酒、陶器など、各地の特産物も増えました。

商業

銀行の役割をはたしていた（土倉）や（酒屋）を保護し、そこからの税によって経済的に豊かになっていきました。

同業者ごとに（座）とよばれる団体をつくり、武士や貴族に税を払うかわりに（営業を独占する）権利を認めさせていました。

港には、海を使って物を運ぶ（問（問丸））とよばれる運送業者が倉庫をかまえていました。

陸上では（馬借、車借）とよばれる運送業者が活動していました。

熊野詣など、寺社の参詣がさかんになり、寺社の門前には（門前）町が生まれた。

農村

有力な農民を中心に、村ごとにまとまり、（惣）とよばれる自治組織をつくり、（寄合）を開いて村のおきてを定めた。

団結を固めた農民は、荘園領主や守護大名にも抵抗するようになり、（年貢を減らす）交渉をしたりした。

また、15世紀になると（土倉）や（酒屋）を襲って、借金の帳消しを求める（土一揆）が起こるようになった。

↓

日本の歴史上、一番最初の一揆（正長の土一揆）
馬を使った陸の運送業、馬借や農民が徳政令を求めた一揆。